

教育心理学の現実性，可能性と必然性

吉田章宏

はじめに

「教育心理学の現実性，可能性と必然性」と題するこの論考は，実は，私が1997年以来，メモとして，その時々々にPCに書き溜めては，加筆修正を続けてきた，下書きしたアイデアに基づくものである。そのメモの一部を，今回，限られた時間の中で，多少とも読める形にまとめて，ここに発表する。しかし，基本的に，詳細に展開するというよりは，アイデアを，そのまま書きとめるという趣のものになる。私が2009年の現在置かれている時間的狀況の下では，それはやむを得ないこととして，自らを何とか説き伏せて，とりあえず，発表することとしたものである。

心理学の多種多様性と混沌について

心理学の多種多様性については，既に，何か所かで繰り返し述べてきている（例えば，吉田章宏，2009，YOSHIDA，2010）ので，ここで繰り返すことは避けたい。ただ，これまで私は，その多種多様性が，いつの日か統合されて，真正の学問としての「心理学」となることを望むという方向で，述べる場合が多かったように反省する。つまり，統合性による秩序に積極的価値を認め，多様性による混沌に消極的価値を見る，という考え方を，今思えば，十分の吟味なしに受け容れて，統合を希求するという含意を，その時々々の主張に暗黙のうちに含めていたことになるかも知れない，と，私は近頃，反省し始めている。

最近，心理学の多種多様性とその状況を生きる人間の在り方を主題的に考えることを始めるようになった。また，その多種多様性のもつ意味を改めて考えるようになった。一方には，混沌を嘆き，心理学の統合を待ち望む論者がいる。あるいは，統合の困難を認め，将来においても統合の可能性を断念すべきことを，やや皮肉を込めて，訴える論者もある。しかし，現在の私には，多様化と混沌とも積極的な意味が認められるのではないか，統合化と秩序のみに価値があるとする判断は，性急に過ぎるのではないか，という思いが，次第に生まれてきている。ここでは，そのような思いが生まれてきた経緯を述べることはしな

い。先の論稿（吉田章宏，2009，Yoshida, A. 2010）では，霜山徳爾（1989），S. Koch（1999），Hall&Lindzey（1957），らに学んで，この問題を巡る多様な視点の一端を垣間見たのであった。が，さらに考えを進めると，性急な統合を求めることが果たして真に望ましいことかどうか，という疑問が生じて来たのである。もちろん，「性急な」が，何時になったら「性急な」でなくなるか，という問いも生まれてくるであろう。さらに，誰が性急か否かを判断するのか，また，判断できる能力と資格があるのか，という問いも提起され得る。そして，さらに，そもそも，果たして，心理学の現在の多種多様性は，真正の学問「心理学」を築く基礎として，十分の多種多様性であるか否か，という問いさえも生まれうる。現在の多種多様性は，人間心理の豊かさや複雑さからして，むしろ，まだまだ不十分な多様性に過ぎないのではないか，という思いも生まれてくるのである。そうしてみると，大事なことは，現状の多種多様性と混沌を，十分の吟味なしに，直感的に消極的に評価して，嘆くに留まることではないであろう。そうではなくて，混沌と秩序の持ち得る意味を，そして，心理学なる学問が，現在までのその独自の混沌と秩序に発して，将来，どのように発展して行くかについて，想像力逞しく，慎重に吟味をすることにより，将来の長期的な展望を持つことこそが大事なのではないかと私は考えるようになった。

短く付言すれば，そのような変化が起こった契機には，一方に，秩序と統合への期待が，現実には，絶望的であることが改めて確かなこととして見えて来たこと，他方に，混沌と多様の積極的な意味が確信されたことがある。それは，現象学的に言えば，現象的還元により，混沌と秩序の意味を改めて，素直な目で見直すことが始まったことだ，とも言える。さらに具体的には，数学的な「次元」の問題を考えるささやかな機会が得られたこと，さらには，空海の秘密曼荼羅十住心論の思想の一端に触れる機会に恵まれたことも，私にとって，大きな刺激となっている。

ともあれ，心理学には多種多様なものがあり，心理学全体としては，混沌の状況にある，それが，本論の出発点である。

さて，私の生涯は，気がついてみると，心理学の中でも，偶然か運命かは知らぬが，何故か，「教育心理学」と深い縁で繋がって来た。そこで，以下での論述は，直接的には「教育心理学」を主題として述べたいと思う。しかし，それは，分野を狭くして一般性を失った特殊な議論にすることを，必ずしも意味しない。「教育心理学」も，「心理学」と同様に，多種多様な混沌の中にある。そこで，いわば，「心理学」を「教育心理学」に準同型的（homomorphic）に写像することにより，より具体的に論じる可能性を広げるという積極的な意味がある。そして，さらに，構造的には，その準同型性により，ここでの「教育心理学」の議論は，本質的な点において，構造的に，「心理学」一般に逆写像することが可能である，として，ここ

での考察の一定程度の一般性を主張しておくことにしたい。

現実性、可能性、と必然性

現象学を学んでみると、意識するか否かとは別に、「現実性、可能性、と必然性」についての一つの感覚を身に付けることになる。現象学の基本的な方法である「現象記述、自由想像変容、と本質観取（本質直感）」は、それぞれに、「現実性、可能性、と必然性」と対応している、とも言えるからでもあろう。

この問題自体、巨大な問題である。ここでは、本論に入る準備として、ささやかに、二三の紹介をするにとどめたい。

この問題を考える度に、必ず想起されるのは、以下の、比喩を表現した文章である。

現象学的精神病理学者 L. ビンスワンガーは、その患者エレン・ウェストの現存在が生きる世界の下位世界として三つの世界を記述している。「この現存在が現にあるところの世界とは、地上の世界、空中の世界、地中地下の世界の三つであり、現存在の運動は地上においてはあゆみであり、空中においては飛翔であり、地中地下においては爬行である。これら三つの運動には時熟と空間化とのそれぞれ特殊な形式が対応しており、またそれぞれ特有の物質的緊密度、特別の明るさと色合いが対応している。そしてこれらはそれぞれ特有な帰趨の全体（Bewandtnisganzheit）をあらわしているのである。第一の世界が実践の意味での帰趨の全体を表しているとするれば、第二の世界は『翼をもった』願望と『最高の理想』の世界をあらわし、第三の世界は『地中へひきずりこむような』（ヴァレンシュタイン）、『気を減らすような』、煩わしい、重苦しい、『欲望』の世界、換言すれば、『自然な現存在』のもついろいろな要求によって作られた世界をあらわしている。」（ビンスワンガー、L, 1959, 141-142）

この文章には、臨床心理学者であり、私たちが翻訳した『現象学的心理学』の著者である、Ernest Keen も、深い関心を寄せていて、以下のような、内容あるコメントを加えている。しかし、現在、訳書は入手が困難である。幸い、私自身がその翻訳者でもあるので、やや長い引用になるが、敢えて、引用させていただくことにしよう。

「ビンスワンガーは、人間の実存の基本形態を、私達がそもそも人間として存在するための地平を提供する三つの異なった仕方で構造化された世界、あるいは風景、を用いて記述している。その三つの世界とはすなわち、天空の世界、地中の世界、地表の世界である。私達は、これらの世界が、私達に知られている、とは言わない。それはその中で私達の知ること（あるいは、感じること、行為すること、存在すること）が生じる構造的なコンテクストを形成

する。それらは地平なのである。

天空の世界とは、その中に私達が時には全面的に存在し、部分的にはつねに存在している、明確な形をもった世界である。そこには、もろもろの可能性が充満している。限界は存在しない。時間は走り行き未来に向かって速やかに飛び去り、ありうることの輝かしいイメージに向かって前へずずっと進む。理想主義が現実である。地表のもろもろの制約を免れて鳥のように飛ぶ、という身体感覚、浮揚するような、そして無限のエネルギーに満ちた身体感覚が、解き放たれた楽観主義のモード（気分）と、ユートピア的な幻想の認識といっしょになって、世界の中の私達の存在が創造性と生そのものの自発性を伴って天翔ける世界を生み出す。/それとは違った世界の中の存在形態の基礎にある地中の世界の構造は、もろもろの必然性の世界である。時間は着々と、止むことなく過ぎ行き、時間の経過から生まれてくるものは、古くなり、生命力が枯渇し、腐敗し、衰え、純然たる物質のみからなる動けないものへと崩壊していくことのみである。人間の自己は重苦しく、まるで生気を欠き、重々しく、びくともしない堅さをもった身体のようなものである。そのモードは悲観主義の一種である。墓地の暗さ、墓穴のしめっぼさ、地の底にあることの息の詰まる閉塞——場所もなく、空間もなく、自由もなく、運動もない——がこの世界を特徴づける。私達は捕らわれており、必然性という拘束からの脱出は不可能である。時間をもたらず唯一の変化は、内部からの止むことのない崩壊であり、外部からの容赦ない重圧による破壊である。（中略）経験的には、モードとは…世界内存在の一つのあり方なのである。/地表に立つことの、あるいは地表を闊歩することの世界は、実践的な行為の世界である。私達はみんな、可能なものの領域における想像の飛翔を、必然なるものの領域における人間の有限性のもろもろの限界と、何とかして調和させなければならない。地表の世界では、私達は可能なるものを取り上げ、それを必然なるもので調節していく、また、必然なるものを取り上げ、それを可能なるもので生気づける、世界の中になる人間存在は、この両者をともに変えていく。私はいつの日か死ぬであろう、しかし、今日のところは生きている。今日のところは、私は生きている、しかし、いつの日か死ぬであろう。私のおまえへの愛は無限だ、しかし私はまた、世の中の仕事に時を費やさなければならない。私は世の中の仕事に時を費やさなければならない。しかし、その仕事と世界が意味あるものになるのは、おまえに対する無限の愛あればこそである。ピンスワンガーは、……、この人間存在の三つの基本形態が、私達すべての経験的世界の中で一つの具体的な現前を持っていることを示している。（中略）実存的な状況というものが、もろもろの可能性の一つであること、もろもろの限界の中でのもろもろの選択の一つであることを示唆している。」（キーン、E., 1989, 119-121）

現実性と可能性の間の関係については、発生的認識論者のPiaget, J.が、具体的操作（concrete operation）の段階では、可能性は、現実性の手探りの延長として探索されるが、形式的操作

(formal operation) の段階では、論理的数学的操作によって、可能性の全面的展開が可能となり、現実性は可能性の一つとして位置づけられ、意味づけられる、としていたことが、想起される。ピンスワンガーとピアジェとが、現実性と可能性を媒介として、図らずもここで出会う。

Robert Musil の可能性と現実性についての考え方も同様である。

さて、別の視点から、もう一つだけ、自作の比喩を挙げて、以上を補強しておきたい。その比喩とは、「現実性と可能性と必然性: 水滴と雲と稲妻と電、そして氷河と」と題する、以下のような自作の比喩である。

「一滴の水、雲となる。その雲が、稲妻の閃光を呼ぶ。ひとつの現実性、小さな事実の水滴は、縦横無尽の多視点性による想像自由変容、無限に拡大拡散する想像の力により、無限の可能性の雲となる。その無限の可能性である巨大な雲が、一閃の稲妻に刺し貫かれる。すると、そのとき、水滴と雲と稲光は、必然性の氷としての電を結晶させる。水と雲と電とは、互いを求め合い、互いを支えあう。現実性は水、可能性は雲、そして、必然性は電であり氷結である。水は沸騰して蒸気となり、蒸気は雲となり、氷結して雪となり、電となり、硬い結晶となる。事実性の水滴は蒸発し膨張して、可能性の雲となり、可能性の雲は、稲妻に貫かれて、冷却され圧縮され凝結して、必然性の電となる。その必然性の電は、太陽の熱で融解して、再び、現実性の水滴となる。そのようにして、水滴、雲、電は、循環する。」(吉田章宏 作, 2009)

言うまでもなく、比喩はあくまで比喩である。しかし、事柄の本質を、イメージ豊かに示唆し、生き生きと想い描かせてくれる助けになるならば、比喩はそれとして力をもつ。

現実性 (Reality), 必然性 (Inevitable Necessity), 可能性 (Possibility), の間には、互いの呼び合いと支えあいがある (RIP)。同様に、象徴性 (Symbolic), 虚構性 (Imaginative), 事実性 (Real), の間にもまた、互いの呼び合い支えあいがある (SIR)。このことについては、“RIP MOM-friendly SIR STOP etc.” と定式化して既に詳論 (吉田章宏, 2008) した。

心理学における、三者の相対的比重

西欧の心理学は、18-19世紀の物理学、生理学、化学などの自然科学の急速な発展と進歩に憧憬を抱き、それまでその一部を成していた哲学から離れて独立して、「自然科学としての心理学」の創建を目指した、とされている。そのことによって、哲学に従属していた心理学的研究に、独立の「科学」としての新しい展望が開けたことも、否定できないであろう。しかし、本論の主題である、「現実性、可能性、必然性」という観点からすると、これら三者の間の相対的な重みづけに質的变化が起こったということも、否定できないのである。ことに、心理学における実証主義の全盛に伴って、実証的な事実のみの重視が力説され、「現

実性」と「必然性」が最重要視されるに到った。ここでの「必然性」とは、事実に基づく「規則性」あるいは「法則性」としての「必然性」である。心理学の発足当時の精神物理学 (Psycho-physics) の成功は、この方向の基礎を築いたとも想像される。ところが、心理学が発展し、次第にその問題領域を拡大するに従って、事実から法則を、という方向だけでは不十分であることが次第に露呈されるに到った、と私は考える。別の言い方をすれば、「可能性」の重視が、要請されるようになってきている、と考えられるのである。これは、自然科学の先端的研究においても、見られない傾向ではないが、しかし、「人間科学としての心理学」においては、決して見過ごしてはならない、重点の大きな移動である、と私は考える。言うまでもないことであるが、それは、「現実性」の重要性を否定することになるわけでは、決してない。ただ、「自然科学としての心理学」におけるように、「現実性」のみに留まっていたら、「人間科学としての心理学」の場合、不十分であることを免れない、ということなのである。

心理学は、研究対象が人間であるだけでなく、研究主体も、基本的に同じ人間である。まず、研究される対象である人間が、過去を担いつつ、未来に向けて、現在を生きる、時間性を生きる実存であることということが気づかれる。すると、研究する主体である人間も、実は同様なのであると、気づかれるということが、遅かれ早かれ、必然的に起こる。

その研究主体である人間が、対象である人間とその対象の置かれている状況を研究する。すると、研究主体である自らも、そのように研究している対象の中の一人であることに気づく。対象についての真の理解の深化が起こるならば、必然的に、研究主体である人間としての「我」(われ)についての理解も深まる結果となる。それが、「人間科学としての心理学」のもつ必然性である。

それだけでなく、実は、研究される対象であるはずの人間も、研究しようとしている主体とその状況を、そしてさらに、一人の人間として、また、自らの置かれた研究状況を、自ら極めて素朴な仕方であれ「研究する」ことにもなる。小学校の子どもでさえ、教師の人間を、そして、研究者の人間を、子どもなりの仕方、「研究する」。人間相互の関係の中で行われる心理学研究の一般的な状況である。そして、心理学研究は、そのことを無視できなくなる。

さらに、心理学の研究の成果が、研究対象である人間にも知られる状況が生まれる。心理学ブームは、それをもたらす。そして、そのことが、心理学研究を、常に、「時代遅れ」とまでは言わないにせよ、「時間遅れ」、もしくは、「日月遅れ」とする状況が出現する。すなわち、心理学が進歩し普及すれば、その心理学を知る人間の出現と増加により、心理学の対象となる人間に質的变化が起こり、心理学そのものが、そのような人間を対象とはしていなかったかつての心理学の成果に安住することを許さない状況が生まれる。この状況は、精神

科医にとって、同業の精神科医である患者は、扱いにくい患者であり、少なくとも、ナイーブで素朴な患者とは、異なる配慮が必要な事態を招く、という精神医学者・笠原嘉の洞察にも、典型的に現れる。ナイーブな患者のみの状況と、ソフィスティケートした患者の多い状況とでは、必要とされる学問にも、現実の対処の仕方にも、質的变化が求められるのである。あるいは、一頃流行った「実験者効果」の一つ事例のように、「心理学ずれ」した心理学科の四年生の学生は、心理学実験の被験者としては、新入生の一般学生とは、少なくとも異なる配慮を必要とする、という挿話にも、この問題は現われている。

さらに、「他者の心理学」において、他者の行動と経験を「説明」あるいは「理解」するには、その他者と同じ状況に置かれた場合に、自らがどのような行動と経験をすることであろうか、ということについての自己洞察が、明示的にせよ黙示的にせよ、また、消極的にせよ積極的にせよ、参照されるということがある。そのことは、研究する人間の自己理解の豊かさと深さ、多面性と柔軟性が、「人間科学としての心理学」には求められるということの意味する。

これは、「自己理解と他者理解」が、人間的意味に満たされている人間の「行動と経験」の「説明と理解」においては、「他者の心理学」においても、相互に緊密に関係してくる、ということである。そして、そのことは、心理学研究者において、学問的研究において蓄積されてきている知識のみに留まらず、自らの日常生活における他者との交流における、いわば実践的な他者理解と、それを支える自己理解が、人間的智恵として、必須であることを意味する。たとえば、教育における人間関係を支える人間知、心理臨床におけるラポールの問題は、このことに関わる。

そして、以上の点と関連して、今日の心理学は「他者の心理学」が基本となっていることと、心理学研究者の人間としての自己研鑽が、必ずしも、心理学研究者の教育の基本に据えられてはいない、という深刻な問題が立ち現われて来る。

この問題は、「自然科学としての心理学」が、実証主義にもとづく「科学」であることを主張しようとして、「客観的」であることを主張し、研究者が誰であっても本質的に同一の結果が得られることをもって、「客観的」で「科学的」であることを保証しようとしてきたこととも、関わる。たとえば、心理学の研究法の基本である「観察する」ということも、誰でもが同じように観察できることであれば、あるいは、浅い意味では「客観的」と呼ばれるかもしれない。しかし、その観察対象を熟知した熟達之士にしか観察できないような事柄を、「主観的」であるとして排除するような、「科学的」と「客観的」の浅い理解の普及を助長することになる危険性を孕んでいる。それは、最も貧しい観察を「客観的」として称え、最も豊かな観察を「主観的」として貶す、というような滑稽な事態を「科学としての心理学」の名において招き寄せかねない。

人間が、自らの行動や経験の規則性や法則性に気づけば、それを意識化し自覚することに

よって、自らの行動や経験を変化させようの限りにおいて、結果として、その法則性に変化をもたらすことが出来る。ということは、人間科学における「法則性」は、人間の意識性を考慮すると、そのような「意識性」を考慮する必要のない自然科学の「法則性」とは、性格を根本的に異にする、ということの意味するのである。将棋の定跡は、総ての指し手に知られる前と、知られた後では、将棋の対局においてもつ意味も、指し手の強さに貢献する度合も、当然異なるであろう。武術の極意は、広く知られてしまえば、極意としての有効性を失う。「秘するが花」は、心理学にも妥当する。心理学的洞察が実践的に生かされた社会における人間の心理学は、その洞察成立以前の心理学とは、既に異ならなければならない必然性をもつ。人間科学としての心理学は、そのことに自覚的でなければならない。ということは、 $P_{n+1} = f(P_n)$ で、 $\lim_{n \rightarrow \infty} (P_{n+1} - P_n) = 0$ となる時、 P は安定する、ということになる。が、そのとき、心理学は既に、新鮮な実践性を失うことになるのかも知れない、ということも意味する。このことは、E. Keen (1972) の言う「新しい意識」の問題と関連する。

「人間科学としての心理学」(Giorgi, A. 1970) は、研究対象としての人間のみならず、研究主体としての人間をも、その視野に入れた心理学とならなければならない必然性をもつ。ということは、過去と現在のみならず未来を、そして、必然性と現実性のみならず可能性を、その視野に入れなければならない。このこともまた、必然性をもつ。可能性を重視することの必要性の必然性が生まれるのである。

そこで、心理学研究者は、いや、より広く言って、心理学学徒は、自らが学ぶ対象としての心理学と同時に、自らがその構築に参加すべき心理学について、単に既存の与えられた心理学の現実性のみでなく、未だ存在しない心理学の可能性にも、常に想像力豊かに、思い描いておく必要がある。これが、研究対象も研究主体も共に人間であることから導かれる必然性である。現実の既存の心理学は、それぞれの歴史性の制約を受けて誕生し存在している。心理学の可能性の展開は、可能性を尊重する現象学に学ぶところが多いであろう。現象学においては、現実性をとらえる現象記述から始まって、可能性を展開する想像自由変更に到り、それを介することによって、必然性を洞察する本質直感(本質観取)に到り、現実性の意味と構造を把握する。その流れに学ぶならば、心理学徒が、心理学の可能性を展開するにも、可能な限りの自由な想像により、多視点的に展開する必要があることになる。

教育心理学の可能性と現実性

前述の通り、ここでは、心理学の同型的写像としての、「人間科学としての教育心理学」を取り上げ、その可能性を展開する可能な次元を列挙する。列挙するに留めるのは、それぞれの次元が、詳細に展開するならば、少なくともそれぞれに一論文のスペースを必要とすることになるであろうからである。

以下の展開では、いわば、心理学の可能性を展開する空間を構成する諸次元を提示し、現実の混沌の中に無数に存在するかに見える諸心理学が、当然のことながら、実はその空間を埋め尽くすほどには濃密に無数には存在しておらず、まだまだ、空虚な空間が残されており、無数の心理学の可能性があることを示す。以上が示せれば、本論の当面の目的は達せられたものと、自らを説得したい。

教育心理学の現実性と可能性（のベクトル）を張る空間の諸次元

以下に、上述の諸次元を列挙する。自由なコメントを加える場合もあるが、スペースの都合で、基本的には、それぞれを特徴づける名前を列挙するもの、とご理解いただきたい。順不同である。

- 1) 「教育」の思想を意識している心理学、意識する以前の心理学、無自覚な心理学。
- 2) 1人称の心理学、2人称の心理学、3人称の心理学（吉田章宏、2002-2009）。
- 3) 必然性の心理学、現実性の心理学、可能性の心理学。
- 4) 個別性の心理学、特殊性の心理学、一般性・普遍性の心理学。
- 5) 現実性の心理学、虚構性の心理学、空想・幻想性の心理学。（可能性を拡大する）
- 6) 出来事の心理学、過程の心理学、人格の心理学。
- 7) 現実の日常生活の理論、そのメタ理論、そのメタ・メタ理論。（限りなく続く）
- 8) 自己洞察（自己解放）のための心理学（小乗仏教的）、他者支配のための心理学、他者解放のための心理学（大乘仏教的）
- 9) 自己省察を促す心理学、対象の説明にのみ終始する心理学、自己と世界の全体的関係についての理解を深める心理学。（安永浩のA/B）。
- 10) 強者（支配者、勝者）のための心理学、弱者（被害者、犠牲者、敗者）のための心理学、強者・弱者共通のための心理学。（「弱者にも力がある」George Kunz, 「敗者は犠牲者とは異なる」リクール）
- 11) 体系（理論）化に向かう心理学（モダン）、体系（理論）化に向かわない心理学（ポストモダン）、その方向が不明・未決定・無自覚・無意識な心理学。
- 12) 数量による心理学、言葉による心理学、映像音声による心理学（ハイブリッドも）。
- 13) （その心理学を学んだ者が）言行一致となる心理学、言行不一致に留まる心理学、その方向が未だに不明・未決定・無自覚・無意識な心理学
- 14) 発展段階を考える心理学、発展段階は考えない心理学、その方向が未だに不明・未決定・無自覚・無意識な心理学（アシュビー流の「超安定性」(Ultrastability)の問題が視野にあるか否か）
- 15) 系統発生と個体発生と、マクロ発生とミクロ発生と、ミクロ学習とマクロ学習と。何

- れの心理学か。(学習と発達の連続と不連続の解明も)。
- 16) 日常性の心理学 (常識の心理学), 非日常性の心理学 (非常識の心理学), 超常性の心理学 (超常心理現象の心理学, イアン・スティーヴンソン, キューブラ・ロス)。(何が日常か, 非日常か, 常識か, そして, 超常か。自明性の地平は何か)。
- 17) 専門家のための心理学, 良識人のための心理学, 双方のための心理学。(記述のありかた。素人を無視する心理学, 素人におもねる心理学)
- 18) エリート主義の心理学と, 大衆主義の心理学と, 双方を向いた心理学と。
- 19) 源体験の再活性化を促す心理学, 出来合いの概念を伝える心理学, 両者を兼ねる心理学。(フッサール『幾何学の起源』による「空洞化」と, 学問と文化の「伝承」における「再活性化」の問題)
- 20) 物質 (体), (生物体) 植物, 動物, 人間の存在の階層の区別に意識的な心理学と, 区別に意識的ではない心理学, 部分的に意識的な心理学
- 21) 死後の世界まで視野に入れた心理学と, 全く視野に入れていない心理学, 部分的には視野に入れている心理学。
- 22) 心理学の内容と方法が, 人間の心理として, バランスがとれているか, アンバランスか。(たとえば, 対象として「最高の心理」まで扱うなら, それをとらえる主体の心理もまた「最高の心理」によるのでなければなるまいに。)
- 23) 内容的に芸術と縁のある心理学と, 芸術とは無縁な心理学と。(科学とは何か。芸術とは何か, 虚構の意味ともつながる。小説, 詩や文学, 絵画, 演劇, 音楽, 映画, ……などにつながる心理学か否か)
- 24) 真正の〇〇心理学と, 応用心理学としての〇〇心理学と。特定分野の心理学の場合, その特定分野Aの事象に即した実践と研究から, 根源的に, 発している心理学と, 他の分野Bの事象に即した真正の実践と研究の, 分野Aへの(便宜的/借り物的)適用あるいは応用として生まれた心理学と。(真正の研究の植民地的領域となる可能性をはらむ。そこに独立の契機が無いわけではない。両者の対比には, 例えば, 教育心理学の場合。教育実践の現場に即した, 実践者あるいは研究者による, あるいは, 場合によっては, 学習者による, 経験記述に発する教育心理学と, ネズミ心理学としての行動主義心理学の教育事象への応用とか, コンピュータによる認知心理学の教育事象への応用としての教育心理学と, など。ただし, 「回り道」も時には大切。)
- 25) 哲学との親近性, 歴史的因縁を自覚している心理学と, 未だに不明・未決定・無自覚・無意識な心理学。その中間。(哲学にもいろいろ。例えば, 論理実証主義, 分析哲学, 弁証法的唯物論, 現象学, 解釈学, ……など, 何れの哲学と親近性があるか, によって, 多様な心理学が存在する/しうる。)

26) 他の学問分野との連携のありかたによる、心理学の分類が可能である。例えば、生理学的心理学、生物学的心理学、神経学的心理学、医学的心理学、精神分析学的心理学、物理学的心理学、社会学的心理学、論理的心理学（ヴォルフ）、パターンの科学としての数学と親近性がある数学的心理学、…などが、考えられる。この区分は、諸々の学問の分類とその体系化の問題がからんでくるので、私の手には負えない。ただ、この分類の視点があることは、指摘しておく。

27) 著者の年齢は（青年，壮年，老年）／読者の年齢は（青年，壮年，老年）。すると、この相関関係で、心理学の意味が変わってくる。素描的に描けば、たとえば、

	読者	青年	壮年	老年
著者				
青年		共感		
壮年		教訓	共感	
老年		説諭#	教訓	共感

注) あるいは、# 傍観，感嘆，嫌悪，軽蔑，無理解，…。

28) 発達・発展・進化の歴史のどの範囲まで視野に入れるか、その程度の差異・同一による心理学の分類。例えば、個人の発達のうち、ある特定の時期のみを視野に入れている心理学。個人の発達のみを視野に入れている心理学。ある集団・社会を視野に入れている心理学。ある時代における個人の発達を視野に入れている心理学。

29) 自然史と社会史のどの範囲まで視野に入れるか。安定期のみを視野に入れている心理学。変動期のみを視野に入れている心理学。安定期と変動期そして安定期，あるいは変動期と安定期と変動期，などを視野に入れている心理学。宇宙の発達・発展・変化・進化の歴史のうち、どこまでを視野に入れている心理学であるか。ちょうど、永遠の時間のうちの或る一点の時点の地球の上のある地点から宇宙全体を眺めている人間のよう、心理学者は、人間の心理を、自分の生きている一生のある特定の時点の自己の世界に位置付けて眺めている。そう考えると、人間の心理について論じるには、心理学者は、自己独自の生を生きながら、その生を越える脱中心化を必要としていることになる。その脱中心化は、根源的なものでなくてはならず、それゆえに、人間的な深さ豊かさが要求されていることになる。

30) 過去，現在，未来にどのように関係する，指向する，心理学であるか。ニーチェの言う意味で、歴史を、どのように視野に入れている心理学であるか。「記念碑的歴史」，「骨董趣味的歴史」，「批判的歴史」の何れにおいて、心理学の歴史を視野に入れて関わりをもっているか。J. S. ブルーナーは、ロスアンジェルスでの1981年におけるAPAの講演で、ピアジェは現在志向，フロイトは過去志向，そして、ヴィゴツキーは未来志向である。

との単純化した図式を提出していた。フッサールは、その点では、時間を考えていた点で、過去、現在、未来のすべてを視野に入れていた、ということになるだろうか。また、エリクソンも、同様に、目配りが行き届いていた、と言えるだろう。失敗から何を学ぶか、学べるか。失敗から学ぶことができなければ、自らの歴史を積み上げ、それを現在に生かすことができない。しっかりした批判は、その意味で、建設的なのだ。歴史は、連続と不連続をともに重んじなくてはならない。心理学の発達・発展・変化・進化の歴史を、視野に入れている心理学であるか否か。

- 31) グランド理論と、中規模の理論と、小規模（単一現象）の理論。（Mertonの論）
- 32) 無知についての知をもっている心理学か否か。言い換えれば、その心理学の地平を心得ている心理学であるか否か。（少なくとも、経験していないことについて述べている心理学について、自ら経験している世代が、どう受け取るか、また、その逆の方向についても、考える必要がある。言い換えれば、自らが知らないことについて、心理学者として、何を述べるができるか、を明らかにしておくことが必要である。なお、これは、グランド理論と中規模の理論と小規模の理論との区別とは独立に成り立つ。）
- 33) 心理学の存在理由をどこに求めている心理学であるか。そもそも、存在理由の問題を、考えているかいらないか。心理学の生産者、流通者、消費者、そして、再生産者の循環を視野に入れて、そのどこに、自らの心理学を位置付けている心理学であるか。消費者を視野に入れていない心理学と入れている心理学と、など。
- 34) 心理学者自らが、信じている心理学、信じていない心理学、あるいは、そもそも、信じるとか信じないとかなど何も考えていない心理学。建前と本音の使い分けをしない心理学、使い分けをしてばかりいる／はばからない／心理学、そして、場合により時折使い分けをする心理学。世俗的で平明で直接的な表現を使えば、「頭の良い心理学者」と「頭の悪い心理学者」、「正直な心理学者」と「嘘つきの心理学者」、これらの間の、 $2 \times 2 = 4$ 通りの可能性によって、生まれる心理学の違い。つまり、「頭の良い正直な心理学者」と「頭の悪い正直な心理学者」と「頭の良い嘘つきの心理学者」と「頭の悪い嘘つきの心理学者」、それぞれの心理学者による、4種の心理学が考えられる。
- 35) 基本的な類型として、幾つか考えられる
 (人間),
 (事物と人間), (人間と人間),
 (事物と(人間と人間)), ((事物と人間)と人間),
 ((事物と(人間と人間))と人間), (((事物と人間)と人間)と人間) …
- 36) 説明(こちらの枠組みで), 制御(支配)(私の思いのままに), 理解(あちらの枠組みに沿って), 実践, (G. W. オルポート) / 解放(あなたの思いのままに) / 倫理

(人間の在るべき姿に) (ハバーマス/レヴィナス) など。アーベルに学んで、4つの科学的実践の在り方を考えてもよい、「因果分析説明科学」, 「目的達成制御技術」, 「人間解釈理解教養」, 「人間解放倫理実践」(?) …など。有名な「解釈する, と, 変革する」など。

- 37) 身体, 心理, 社会の3類の分類も可能。(西平直『エリクソンの人間学』など)
- 38) 最近流行始めた心理学, もう流行が廃れた心理学, 流行に関係ない心理学など。ことに, 流行の最先端の心理学が, 最も科学的である, という先入観やら思い込み, 迷信は, 自然科学主義と, 自己の判断への自信の無さと, 大勢順応主義「赤信号みんなで渡れば怖くない」などによる。ショウペンハウエル
- 39) 西洋心理学と東洋心理学, あるいは, さらに細分すれば, アメリカ心理学, ドイツ心理学, フランス心理学, イギリス心理学, ロシア心理学, …インド心理学, 中国心理学, 「仏教心理学」, …, そして, 「日本心理学」の伝統は?
- 40) 人間を物質として自然科学的に捉える心理学 (例えば, 神経生理心理学), 人間の物質的な面を全く見ない人間科学的な心理学 (例えば, 意識心理学), それに, 両方の側面を見る・見ようとする心理学 (たとえば, ルビンシュテインの『一般心理学の基礎』, 安永浩の『精神の幾何学』など。) という三つの種類
- 41) 心理学の対象。過去の既存の「心」の研究か, あるいは, 未来の「心」の研究か, あるいは, その双方を視野に入れている研究か。
- 42) 心理学の対象。人間, 生物一般 (動植物, 昆虫, 魚類さえも), 人工物 (人間や動植物のモデルとしても含めて)。(それぞれの時代のモデル, たとえば, 時計, 電話交換機, コンピュータなど。モデルの創造の可能性が心理学を促進するとした, かつてのG. A. Millerの思想も。)

など, など, など, …。とりあえず, 思いつくままに, 以上, 42の「次元」を挙げてみた。「次元」は, まだまだ無数に考えることができるであろう。それゆえ, 以上に列挙したのは, 恐らく, その全体のごく一部に過ぎないであろう。「心理学」あるいは「教育心理学」がそのベクトルを張ることのできる空間は, 人間にとって人間が「永遠の謎」である限り, 無数の次元によって張ることの出来る巨大な空間である, と考えられる。以上の「次元」は, 心理学そのものの内容にかかわるもの (内的地平) と, 心理学のおかれてある脈絡によるもの (外的地平) とを区別することもできよう。

さて, 教育心理学は, そして心理学も同様に, 無自覚に進む限り, 限られた人類の歴史のうちには, この可能性の空間のうちの, 極く小さな断片的空間さえも, 究めることはできないのではないか。一人の心理学者の研究者としての生命が, 仮に40年とすると, 迷うことに

費やせる時間的余裕は無に等しい。そこで、心理学の無限とも思われる可能性のうちから、自らの生を賭けて試みるに値する一つの現実性を選択する、その選択のための原理はありうるか、と問うことが、必須となる。しかし、その原理の可能性も、多数あるであろう。例えば、時代の流行とは無縁で行くか、それとも、多数の受け入れる流行に、「バンドワゴン」に、自らも相乗りすることを望むか、あるいは、自らの信じる心理学を、流行に乗せようと力を注ぐか。それ自体、決定に時間と労力を必要とする事柄である。大多数の平凡な心理学研究者には、無自覚な流行順応主義しか期待できないとするなら、孤立して、自覚的に自らの選んだ道を探求する稀な心理学研究者こそが、人類の知恵を創造してくれるのではないか。極めて稀なる若き心理学研究者よ、現れよ、と呼びかけても見たくなるではないか。そのためには、その選択は、自覚的でなくてはならないであろう。しかも、その自覚は、初心者には極めて難しい。高齢者には、自覚に到達したとしても、それを実現する時間は既に残されていない。人間の生涯における、智恵一般のもつ悲しい運命が、ここにも現れる。

さて、ここで、仮に上記の42の「次元」によるベクトルを張った空間を考えると、どのくらいの種類の心理学が、可能性として、在り得るであろうか。もちろん、「次元」の間には、相互相関性の高い諸次元、つまり、相互に独立で無い諸次元も、混在しているかもしれない。つまり、諸次元の間には、随伴性 (Contingency) があるであろう。したがって「構造」がある。ここでは、仮に、そのことを無視し、さらに、簡単のために、それぞれの「次元」が、なべて三種の分類になっていると仮定してみよう。そして、可能性の概数を計算してみる。

すると、まず、3の42乗となる。対数計算で、実際に計算すると、
 $\log 3 = 0.4771$ であるので、 $42 \times \log 3 = 20.038$ となる。

ということは、可能な心理学の数は、次の数よりも多いことになる。

10000000000000000000

少なめに見積もっても、この数より多いはずなのである。もちろん、これだけの数の心理学が、そして、教育心理学が、実現される現実性も、現実的可能性も、絶無である。また、もちろん、これらの中には、実現不可能な心理学も、恐らく、多く紛れ込んでいるであろう。しかし、それにしても、その数は、現実に存在する心理学の数を考えると、ほとんど無限に近いようにさえ感じられて来る。

それにしても、現実の可能性は、その中の実に僅かである。三分類による多次元により構

成されるひとつひとつの「箱」の中でさえ、その実現形態は無数にある。しかも、その中で、実際に実現されているのは、そのまた僅か、ということになる。私たちは、我々の短い一生の中で、そのすべてに付き合うことは不可能であり、また付き合っではいられない。このことは、明らかだ。そもそも、付き合おうとすること自体が、事の膨大さに無知であることを表現しているのかも知れない。

これまでに現実に存在した心理学が、果たして、以上のような選択を意識的に行ってきたかどうか。それは、極めて疑わしい。そして、意識的でないだけに、その選択が恣意的であるばかりでなく、近視眼的な選択による偶然の成り行きに任されており、個人にとっては運命的ではあったかも知れないが、目的指向的でなかった可能性が大きい、と言わなければならない。そのことが、人々が求める心理学が、例えば、若年期から老年期に移り行くにつれて、変化すること、「彷徨」となって現れることにも、繋がっているのかも知れない。

そこで、私は、いかなる心理学を求めるか、そしてまた、それは何故か、が問題となる。この問題の到来・発生は、心理学がいかにあるべきかを考える以上、必然的であり、また、人間に与えられた時間の限定からして、極めて緊急性をもつ問題である。

現在、七十五歳の私が、3肢選択で、それぞれ、ぎりぎりひとつのみを選ぶとしたら、どれにするか、試みに、選んでみよう。以下がその選択の試みである。

1 人称の心理学、可能性の心理学、個別性の心理学、虚構性の心理学、出来事の心理学、学問（的反省を伴った）領域にある心理学、読者を賢くするための心理学、他者解放のための心理学、弱者のための心理学、体系（理論）化に向かう心理学、言葉による心理学、（学んだ者が）言行一致となる心理学、発展段階を考える心理学、日常性の心理学、専門家・良識人の双方のための心理学、源体験の再活性化を促す心理学、存在の階層の区別に意識的な心理学、死後の世界まで視野に入れた心理学、自己省察を促す心理学、内容と方法のバランスがとれている心理学、自然科学のみでなく、社会科学、人間科学、そして、芸術とつながる心理学、真正の〇〇心理学、・・・・・・。

こうして書いてみると、私が求めている心理学の具体像が結んでくるような思いがする。ピアジェの言う形式的操作を、求める心理学に適用すれば、以上のようなはずである。ピアジェの心理学自体も、この可能性のなかの一つに過ぎない。例えば、ピアジェの心理学は、どうなるか。

2 人称の心理学、（可能性でなく）現実性、普遍性、（虚構性でなく）現実性、出来事・過程、学問的、読者を賢く、他者解放、弱者、体系化、数量・言葉、言行不一致、発展段階、日常

性・非日常、専門家・良識人、再活性化を促さず、存在の階層に無頓着、死後の世界までは視野に入れない心理学、ということになるだろうか。

心理学の統合は、心理学の可能性を多次元的に展開することを介して、ちょうど、二次元平面の難問が、ひとつ次元を増やして、三次元空間で考えることで、容易に解けることになるのと同様に、多次元的な可能性の探究によって、その可能性が見えてくることになるかも知れない。心理学の可能性は無限である。

おわりに

心理学の在り方を定めるのに、ただ、自らに与えられた偶然の境涯に全面的に支配されるのではなく、過去を顧み、将来を展望し、可能性を全面展開して、その中から選ぶべき一つを見極め、その実現として、一つの現実性を選択し実現に努めるということ。歴史を踏まえ、しかし、論理的にも、社会的にも、自由への解放という目標に向けて努力する、そのような心理学を求めること。それは、言わば、心理学的に見て、経験の歴史を生かし、十分に反省的であるとともに、新たな挑戦を恐れない、成熟した心理学者の心理学である。ピアジェ流に言えば、「具体的操作」の段階から「形式的操作」の段階に進んだ心理学者による心理学である、と言えるであろう。

教育心理学者は、ピアジェの「形式的操作」の段階が11歳半から始まる、と紹介し説明する。しかし、自らの、教育心理学の研究の営みの根本における知的な操作が、未だ、「具体的操作」の段階に留まっていることには気づかないことがしばしばある。私の経験では、大学教授でも、「形式的操作」の段階に到達していない場合がよくあった。

教育心理学において、従来忘れ去られてしまった、古代からの人類の心理学、古典的な心理学の、記念碑に学び、そのルネッサンス（再生）を起こすことが望まれる。そして、心理学の研究の営みが、システムの組織的で適合的であり、論理的で、人間関係の「しがらみ」を理解することにより、それに縛られない自由な、社会的にも有意義な営みとなるようにと祈りたい。あまりにも多くの人々の貴重な青春と時間と労力が、無自覚に、無益なことに浪費され、論文・雑誌の用紙を浪費し、公害を生み出すことが、より少なくなることをこそ祈りたい。

教育心理学が、そして心理学が、心から誇れるような、素晴らしい学問となって、それを学ぶ人々、心理学徒の、生涯を豊かなものとし、その学問が、人々の生涯を豊かで幸せなものとする日の到来を祈りたい。

そのことの実現は、私の人生においては、いま、夢として終わろうとしている。

引用文献

- キーン, E. (1989) 『現象学的心理学』 吉田章宏・宮崎清孝訳 東京大学出版会
- ジョルジ, A. (1990) 「現象学的心理学の今日的諸問題」, 吉田章宏編集・翻訳, 『人間性 心理学研究』 第8号, 3-15
- 霜山徳爾 (1989) 『素足の心理療法』 みすず書房
- ビンスワンガー, L. (1959) 『精神分裂病』 新海安彦, 宮本忠雄, 木村敏訳みすず書房, 141-142
- 吉田章宏 (2002) 「心理学研究方法論をめぐる省察－心理学の人称性：我，汝，誰彼の心理学－」 『淑徳大学大学院研究紀要』 第9号, 43-56
- 吉田章宏 (2003) 「心理学研究方法論をめぐる省察：三心理学の不連続化と連続化の道」 『淑徳大学大学院社会学研究科研究紀要』 第10号, 1-17
- 吉田章宏 (2003) 「心理学研究方法論をめぐる省察：心理学の多種多様性について」 『淑徳大学社会学部研究紀要』 第37号, 149-165
- 吉田章宏 (2004) 「心理学研究方法論をめぐる省察：多種多様な心理学の統合の可能性」 『淑徳大学社会学部研究紀要』 第38号, 219-240
- 吉田章宏 (2005) 「心理学研究方法論をめぐる省察：多種多様な心理学の統合は何故必要か」 『淑徳大学社会学部研究紀要』 第39号, 75-95
- 吉田章宏 (2006) 「心理学研究方法論をめぐる省察：三心理学の原定式化の再検討。統合化への『理論的構造』」 『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』 第40号, 39-66
- 吉田章宏 (2007) 「心理学研究方法論をめぐる省察：特定諸方法への偏見を克服し，統合化へ向う道」 『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』 第41号, 65-87
- 吉田章宏 (2007) 「実践報告に虚構化を活かす可能性について：クロッキー風に」 『淑徳心理臨床研究』 第4巻, 5-20 淑徳大学大学院総合福祉研究科附属心理臨床センター
- 吉田章宏 (2008) 「多様化を通じたの統合化の原理－<RIP friendly SIR STOP etc MOM>原理の提唱：人間の生きられる世界の多元的多様化と統合化の原理－」 『淑徳大学大学院社会学研究科研究紀要』 第15号, 21-64
- 吉田章宏 (2008) 「心理学研究方法論をめぐる省察：心理学研究における研究主体と研究対象」 『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』 第42号, 35-57
- 吉田章宏 (2009) 「多種多様な心理学の多様性と共に生き対処する在り方について：諸々の心理学の<混沌>の世界に生きる研究者/実践者，教育者/学習者にとっての問題」 『淑徳心理臨床研究』 第6巻, 5-25, 淑徳大学大学院総合福祉研究科附属心理臨床センター
- GIORGI, Amedeo (1970) *Psychology as a Human Science: A Phenomenologically Based Approach*, Harper & Row
- KEEN, E. (1972) *Psychology and the new consciousness*. Brooks and Cole
- HALL, Calvin S. & Lindzey, Gardner (1957) *Theories of Personality*. John Wiley & Sons
- KOCH, Sigmund (1999) *Psychology in Human Context: Essay in Dissidence and Reconstruction*. Edit. David Finkelman & Frank Kessel, The Univ. of Chicago Press
- YOSHIDA, Akihiro (2010) Living with Multiple Psychologies. In Michael Barber, Lester Embree, and Thomas J. Nenon ed. *Phenomenology 2008. Volume 5, Selected Essays from North America*, Zeta Books, Bucharest, Forthcoming

Reality, Possibility and Inevitable Necessity of Educational Psychology

YOSHIDA, Akihiro

This article proposes that not only the reality and the necessity but also the possibility should be considered in good balance with regard to the future of psychology, educational psychology in particular. First, the two metaphorical images, drawn by L.Binswanger and by E. Keen, of the relationships between reality, necessity and possibility are presented. In addition, another image by this author is also given. The overemphasis of the reality and necessity, under the domination of positivistic view of being “Psychology as a Natural Science” is pointed out. The author analyses the special nature of Psychology, in which both the object and the subject of the research are human existential beings with the temporality and the sociality, in distinction to those natural sciences in which only the subject is human existence. He argues for “Psychology as a Human Science” and for the balanced emphasis of the possibility and the power of imagination to discover the psychological meanings and structures of human experiences and behaviors. From the viewpoints of psychological students, including learners and researchers, who are naturally human existence, this author argues, the possibilities of psychologies should be opened up for the purpose of finding the ways to reach the unity through diversity, to create the cosmos from the chaos now present in psychology. With the method of the free imaginative variation, some 42 “dimensions” to characterize and classify possible psychologies are presented, which is to result at least in the “42th powers of three” kinds of psychologies. The chaos of psychologies is seen now as just a microscopic portion of the whole universe of possible psychologies, and more diversity are proposed to be welcomed before the hasty integration of the psychologies actually present now in the history. More careful examinations of, search for and creation of, the possible psychologies are recommended to the psychological students in the future.